児童養護施設退所者のライフストーリーにみる自立を促す要因

ーインケアにおける自立支援の構築のためにー

○　同志社大学大学院社会学研究科　　氏名　梅谷 聡子（9110）

キーワード：児童養護施設退所者、インケア、自立

１．研 究 目 的

本研究は、児童養護施設のインケアを自立支援として構築するために、児童養護施設退所者のライフストーリーから児童養護施設に入所する子どもの自立を促す要因を明らかにすることを目的としている。

厚生労働省より2017年に発表された「新しい社会的養育ビジョン」には、「代替養育の目的の一つは、当該の子どもが成人になった際に社会において自立的生活を形成、維持しうる能力を形成し、またそのための社会的基盤を整備することにある」とある。

横堀（2012）は児童養護施設の自立支援について以下の二つの概念を提示している。一つ目は、「狭義の自立支援」である。すなわち、施設退所前から施設退所後の時期に特化した、中高生の社会的自立に向けての準備（リービングケア）からアフターケアに至るまでの生活援助をさしている。二つ目に、「広義の自立支援」である。すなわち、日常生活の中でいかに自立に向けて体験を積み重ねるかに観点を置いた考え方、入所が決まったその日から自立支援は始まるという考え方である。これは、質の高いインケアの基盤が、リービングケア、アフターケアへとつながっていくという視点に基づいていると考えられる。

したがって、本研究は「広義の自立支援」の概念に基づき、児童養護施設退所者によって語られた施設入所前からのライフストーリーにおいて、どのような要因が彼らの自立を促し、とくにインケアはどのように影響したかに着目した。

２．研究の視点および方法

2018年9月～2019年4月の期間に、18歳以上で児童養護施設を退所した20歳以上35歳以下の10名の児童養護施設退所者を対象に半構造化インタビュー面接を行った。インタビュー内容は、入所の経緯、入所中の生活、退所直後の生活、現在の生活、入所中を振り返りどのようなケアが必要だと考えられるかについて等である。協力者の選定は、筆者と面識のある施設職員とその紹介によるスノーボールサンプリングを行い、本人に協力の同意を得られた退所者を対象とした。すべての協力者へ筆者が大学院生であり、かつ調査時に児童養護施設のインケアを行う職員であること伝えたうえで調査を行った。 分析は「質的データ分析法」を用いた。

３．倫理的配慮

協力を得られた調査対象者に対し、事前に調査に関する説明書の送付、または当日の説

明を行った。すべての対象者に同意書により研究参加の同意を得た。本研究は、「同志社大学『人を対象とする研究』に関する倫理審査委員会規定」に従い、「同志社大学研究倫理審査会」の承認を得たうえで実施している（承認番号：17097）。

４．研 究 結 果

分析の結果、児童養護施設退所者の自立を促す要因として、＜安定した衣食住環境＞、＜「家族以外の信頼できる人物」の存在＞、＜退所者に理解のある場所の存在＞、＜原家族関係から適当な距離をとる＞、＜生い立ちに対する肯定的な意味づけ＞、が明らかになった。

協力者は、家庭の経済的な問題や親の離婚、家族からの虐待により児童養護施設に入所していた。まずは、入所することによる＜安定した衣食住環境＞が、入所中の協力者が自分の生活に見通しを持つことを支えた。また、協力者には、施設入所中、あるいは退所後に＜「家族以外の信頼できる人物」の存在＞を得ていた。入所していた施設の職員、児童福祉司、市町村の相談員、高校教員、大学教員、アルバイト先の上司、就職先の上司、施設や学校の友人がそれに当たる。

＜退所者に理解のある場所の存在＞としては、就職した地域、進学した大学等、そのコミュニティそのものが退所者への理解があったために、退所者の生活の助けになったことが語られた。また、協力者はそれぞれに原家族に複雑な思いを抱えてたが、＜原家族関係から適当な距離をとる＞という要素が示された。

協力者は、原家族との分離や施設生活といった自らの＜生い立ちに対する肯定的な意味づけ＞を行なっていた（受けた暴力等への肯定ではない）。ただし、現在の生活の充実があるからこそ、過去の生い立ちを肯定的に意味付けられると協力者は語った。この点は、＜原家族関係から適当な距離をとること＞に対しても影響を与えていた。

5. 考 察

本研究で明らかになった退所者のライフヒストリーからみた自立の構成要素のうち、＜原家族関係から適当な距離をとる＞、＜生い立ちに対する肯定的な意味づけ＞、＜退所者に理解のある場所の存在＞は、＜安定した衣食住環境＞、＜「家族以外の信頼できる人物」の存在＞、が基盤となり、実現するものであると考えられる。児童養護施設のインケアにおいて＜安定した衣食住環境＞、＜「家族以外の信頼できる人物」の存在＞の重視が、子どもの自立支援の基盤となるとことが明らかになった。

【参考文献】

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社.

横堀昌子（2012）「インケア児童の自立支援の現状と課題-各種支援の包括的な位置づけと流れ」『世界の児童と母性』72, pp. 11-19.